

観天 望気

農都共生のすすめ

日本では、急激な都市化や縦割り行政の影響などから、農村と都市の地域政策が別々に考えられてきたが、地域活性のためには、農村と都市をトータルに捉える「農都共生」農村と都市の共生」が大切である。都会人が、農家民宿・農業体験などで、グリーンツーリズム（農村地帯で過ごす休暇）を楽しみ、農家が都会で直売所を運営するなどの交流や連携を重ね、農村と都市の相互理解を深めていくことが、農都共生の推進につながり、農村と都市両方の地域づくりに力を発揮する。

都会人のライフスタイルが変化し、「物質的豊かさ」より「心の豊かさ」を重視して、余暇に生活の力点を置く人が増え、農業・農村への関心が高まっている今こそ、農都共生を推進する絶好の機会だ。都市側には、楽しみや心の豊かさを、農村側には、生きがいや副収入をもたらすなど、双方に効果がある。

慶應義塾大学では、ゼミのほか、農村視察研修をしているが、初めて農村を訪れる学生も多い。都会の若い世代にこそ、農業・農村体験が必要だ。美しい農村景観の中で、農作業に汗を流し、郷土料理や農村文化を楽しむ：農業・農村が持つ「癒し」や「教育力」などの多面的機能を体感してほしい。

農村と都市は対立する存在ではなく、互いに必要とされるもの。農村と都市の人たちが連携し、共生することで、情報の循環、人材の循環、経済の循環が生まれ、農村・都市の双方の活性化につながっていく。農都共生の重要性を伝え、多くの人に体験してもらえるような仕組みや、情報発信も必要だ。フランスなどのツーリズム先進国のように、多くの国民が長期休暇をとってグリーンツーリズムを楽しみ、農都共生を実践できる社会となるためには、バカンス法の制定も望まれる。

何より、農村側が一体となって、都会に対して農業・農村の多面的機能を伝え、共感を得ていくことが大切だ。その共感の輪が、農村地帯を元気づけ、日本の農業・農村をしっかりと守っていくことになる。農都共生の推進が、日本全体の元気づながっていくのだと信じている。

慶應義塾大学大学院SDM研究科特任教授

林 美香子



はやし みかこ

北海道大学農学部卒業。札幌テレビ放送アナウンサーを経て独立。北海道大学大学院で博士（工学）を取得。農都共生研究会会長。北海道大学大学院農学研究院客員教授。著書に『農都共生のヒント』『農村へ出かけよう』（寿郎社）など。札幌在住。